空間・社会・地理思想 22 号，29-43 頁，2019 年
Space, Society and Geographical Thought

カール・ハウスホーファーとドイツの地政学

クリスティアン・W・シュパング *（高木　彰彦 ** 訳）

Christian W. Spang (Akihiko TAKAGI)

Karl E. Haushofer, Geopolitics of Germany, *Zeitschrift für Geopolitik* and Pan-ideas (Haushofer, 1931), entries for *The Encyclopedia of New Geopolitics*, 2018

Translation permitted by the auther and Maruzen Publishing Co., Ltd.

I. カール・ハウスホーファー

1. 家庭環境と軍人としてのキャリア

1869年ミュンヘンに生まれたカール・ハウスホーファーKarl Haushoferは，学者や芸術家の家系に恵まれた家庭に育った．彼の二人の祖父，マックス・ハウスホーファーMax Haushoferとカール・N・フラースKarl N. Frassはともに教授であり，伯父のカール・フォン・ハウスホーファーKarl von Haushoferも教授だった．彼の父，マックス・H・ハウスホーファーMax H. Haushoferはミュンヘン高等技術学校（今日のミュンヘン工科大学）の政治経済学の教授で議員でもあり，学術的著作のみならず文学作品でも著名な作家であった．

こうした家系にもかかわらず，カール・ハウスホーファーは，1887年に（ドイツ帝国から）半独立的な王立バイエルン軍に入隊した．ハウスホーファーは，最初はバイエルン陸軍士官学校（1888/89年）に通い，その後王立バイエルン砲兵・工兵学校(1890-92年）に進み，最終的にバイエルン陸軍大学校に進学した(1895-98年)．これらの学校はいずれもミュンヘンにあった．陸軍大学校での教官としての在職期間(1904-07年）も加えると，ハウスホーファーは，その陸軍軍人としてのキャリアの最初の20年を教育機関で過ごしたことになる．

1907年はハウスホーファーにとって大きな転機となった．1月27日に，彼は突然バイエルン陸軍大学校を辞め，ミュンヘンから350kmほど離れたバイエルン・プファルツ(宮廷領）のランダウにあった，バイエルン第三師団の参謀へと転身したのである．その年の4月9日に父が亡くなった時，ハウスホーファーは住み慣れた土地を離れて生活を変えようと決意した．ランダウから離れるため，彼は日本への軍事オブザーバーのポストに応募した．バイエルン人武官が日本に初めて派遣された理由は，1904/5年の日露戦争に日本が勝ったからだった．ドイツ帝国とバイエルン王国はしばらくの間戦争を経験していなかったため，日本がどのようにしてロシアに勝つことが出来たのかを，軍が知りたがっていたのだ．1907年6月24日に駐日軍事オブザーバーに選ばれたことを知らされると，その後五ヶ月も経たないうちに，彼の人生は天地がひっくり返るほどの混乱に陥った．

いくらかの日本語を学び，日本で役立ちそうなものを西欧の言語で読んだあと，彼は妻マルタMartha（1896年に結婚）とともに東アジアへと旅立ったが，幼い二人の息子アルプレヒトAlbrecht（1903年生まれ）とハインツHeinz（1906年生まれ）は同行しなかった．1908年10月から1909年2月にかけて，夫妻はイタリアを出港し，スエズ運河を経由してセイロン（現スリランカ）とインドに到着した．ここで夫妻は，シンガポール，香港，上海での待ち時間も含めて8週間ほど滞在した後，日本に到着した．その後，ハウスホーファーは，1909年2月から1910年6月までの16ヶ月を東アジアで過ごした．

この間に夫妻は日本国内をくまなく旅行しただけでなく，朝鮮，中国，満州にも出かけた．健康上の問題から，京都にあった第16師団での業務を9ヶ月に縮めて，1910年の梅雨の時期になる前にシベリア縦貫鉄道経由でドイツに帰国した．

ハウスホーファーは日本に短期間しか滞在しなかったにも関わらず，当時多くいた他の外国人訪問者よりも多くの見識を得ることができたのには様々

*　大東文化大学
**　九州大学

な理由がある．第一に，彼は東アジアへの旅行以前および旅行中に入念な準備を行っていた．第二に，彼は日本当局に登録されていなかったため，最初の数ヶ月間, 日本国内を隠密に歩き回ることができた．第三に，夫妻は日本人教師から日本語を学んだが，この教師も旅行に同行したのだった．第四に，夫妻は西洋人仲間と交わるのではなく，できるだけ日本人との交流を深めようとした. その結果, ハウスホーファーは日本滞在中，直接的および間接的に，後に重要となる関係を築くことができた．主な人物を挙げれば，駐独公使および外務相を務めた青木周蔵とその家族，陸軍軍人で1930年代に影響力のある政治家となった菊池武夫，後に日・独の学術関係で役割を果たすことになるフリードリッヒ・マクシミリアン・トラウツFriedrich Maximilian Trautzなどがいた．

さらに，ハウスホーファーを受け入れた日本の人々は，他の外国人には閉鎖的だったのに対して，彼には開放的だった．こうした礼儀正しい扱いの理由は，多くの日本人武官や医学生が数十年にわたってバイエルンに留学してきたにも関わらず，バイエルンからは誰も日本に来ていなかったためである．したがって，ハウスホーファーが，東京で天皇が主催した観桜会や観菊会，さらには天長節祝賀行事にも招待されたのは偶然の一致ではなかった．

バイエルンに戻ってから，ハウスホーファーは第一次世界大戦での戦闘を最後に兵役を終えた．この間，彼は陸軍大佐に昇進し，1919年末に退役した際には陸軍少将に昇進していた．

2．研究者としてのキャリア：1913-44 年

先に述べたように，健康上の問題があったため，ハウスホーファーは，第一次世界大戦前には通常の軍務から離れていた．彼は長い休養期間を数多くの論文の執筆に費やした．彼の最初の著作は『大日本 ── 大日本帝国の軍事力，世界的地位と将来に関する考察』（*Dai Nihon, Betrachtungen über Groß-Japans Wehrkraft, Weltstellung und Zukunft*）だった．妻の発案と援助で，彼はルードウィッヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（LMU）から「日本と日本周辺地域の地理的発展におけるドイツの関与，および戦争と国防政策の影響を通じてのその促進」というテーマで学位を取得した．

ハウスホーファーは，こよなく愛したバイエルン陸軍大学校の校長として任期を全うすることを夢見ていたが，同校は第一次世界大戦後には存続しなかった．代わりに，49歳の老大佐は腰を落ち着けて大学教授資格ハビリタツィオン論文を書き上げ，1919年秋にはLMUの地理学科で教え始めた．名誉教授にすぎない身分で，ハウスホーファーは研究室を与えられず，学科の運営にも関わらなかった．にもかかわらず，学生の間での彼の評判は年ごとに増していった．退役陸軍少将として，事実上年金で生活していたハウスホーファーにとって，こうした立場は理想的だった．というのも，この地位は彼に学問的な信頼性を与えるとともに，十分な研究，出版，その他の活動の自由を与えたからである．ナチスが政権をとった後，ハウスホーファーは，LMUの他の何人かとともに，名誉教授ではなく教授と呼ばれる権利を得た．

日本および太平洋に関する著作で，ドイツ人の極東専門家の一人としての地位を獲得した1920年代前半に，ハウスホーファーは，初の地政学月刊誌で世界的に悪名高い『ゲオポリティク』*Zeitschrift für Geopolitik*（*ZfGp*）誌を刊行し，1924年から1944年まで共同ないしは単独で編集者を務めた．今日のバイエルン放送の前身の放送局で，1925年から1931年までと, 1933年から1939年まで毎月1回放送された,「世界政治講座」Weltpolitischer Monatsberichtという名の世界事象に関する解説講座とともに，本誌によって彼の名はドイツおよび国外において著名なものとなった．

1920年代以降，ハウスホーファーは東アジアを越えて自らの研究範囲を広げ，国境問題，防衛問題，海外ドイツ人事情，ライン川など，他の事象に関しても出版するようになった．彼はさまざまな短編の伝記物も刊行した．にもかかわらず，彼の論文の3分の2と著書の2分の1はアジアないしは太平洋を扱ったものであった．ハウスホーファーが600以上もの論文，総説，死亡記事，入門書と，3ダースもの著書を刊行したという事実からすれば，彼は確かに同時代の最も精力的な出版家だった．

3．カール・ハウスホーファーの地政学概念

ハウスホーファーは東アジアでの滞在以来，いわゆる大陸横断的ブロック概念を普及させた．ハルフォード・マッキンダーHalford Mackinderの著名な，1904年のハートランド理論を知っていなくとも，彼は大概そうしただろう．何年か後に，ハウスホーファーはマッキンダーについて知り，ロシアとドイツの協力の大きな可能性について，彼の世界観とマッキンダーのそれが重なっていたことを悟ったが，それが望ましいのか（ハウスホーファー），望

ましくないのか（マッキンダー）という問題になると，意見が異なっていた．ハウスホーファーの地政学概念のもうひとつの源は，ホーマー・リーHomer Leaの著書『サクソンの時代』（*The Day of the Saxon*, 1912）だろう．その基本的な主題がハウスホーファーの大陸横断的ブロックに近いからである．にもかかわらず，『大日本』の参考文献には，マッキンダーもリーもハウスホーファーによって言及されていない．第一次世界大戦後になって，ハウスホーファーは二人やマハンなど他の西欧起源の概念について引用するようになる．

第一次世界大戦前に刊行された『大日本』において，ハウスホーファーは，ベルリン，ウィーン，サンクト・ペテルブルク，東京という4つの皇帝同盟を示唆した．後にハウスホーファーは，ソ連および日本を伴った独伊同盟を呼びかけた．モスクワの共産主義体制との密接な協力を積極的に支持するのは不適切とみなされていた時期にあって，ハウスホーファーは，ドイツは理想的には日本と足並みをそろえつつ，アングロ・サクソンの優位性に対抗して，「持たざる者」の連合という植民地勢力に対抗する中国およびインドと連携すべきと主張した．こうして，少なくとも敵は同じままだった．

これを踏まえると，ハウスホーファーが，ゲオポリティク誌の編集仲間であるエーリッヒ・オプストErich Obstとは異なって，かつてのドイツ植民地の返還要求には反対だったことは驚くべきことではない．彼は，アフリカはドイツが大国に返り咲く資産としては遠すぎると考えていた．また，ハウスホーファーは，a）ドイツが何を要求しようとも，かつての植民地を受け取ることはなく，b）すでに第一次世界大戦で確証されたように，何らかの紛争の場合にも，海外領土を守ることはできないことを，十分に理解できるほど現実主義的だった．さらに，ハウスホーファーは，当時一般的だった人種主義者ではなかったものの，彼にとって，アフリカ人がヨーロッパ人と同じだと認めるのは困難だった．しかし，中国人，インド人，日本人については，彼はそうした問題は持っていなかった．

ハウスホーファーがしばしば言及したよく知られた概念に「汎概念」ないしは「汎地域」がある．最もよく知られているのは『汎概念の地政学』（*Geopolitik der Pan-Ideen*, 1931）で，彼は互いに矛盾することもあるさまざまな汎概念について述べた．同書はナチが政権を握る前に刊行されたため，ハウスホーファーは，理想的には「汎アジア主義」などのように大陸的スケールでの領域的特徴に依拠する「汎概念」が，「汎ドイツ主義」や「汎スラブ主義」のような，人種に基づいたものよりも説得力があると主張することができた．興味深いことに，1931年になると，彼はモスクワをベースにした概念として汎アジア主義を解釈するようになった．彼によれば，米国は二つの対立する汎概念，すなわち，大陸的概念である汎アメリカ主義と，海洋的な概念である汎太平洋主義とに従うのだ．米国が主導する「汎アメリカ」，ドイツとイタリアが支配する「ユーラフリカ」，日本が指導する「汎アジア」，ソビエトが支配する「ユーラシア」という，世界が三つないし四つに区分されると主張する，ハウスホーファーの幅広い理解は解釈のしすぎだと述べておきたい．

ハウスホーファーがよく述べたもう一つの重要な地政学的概念は，西欧諸国からそれほど多くの関心を持たれなかったし，1945年以降も，今日でさえもそうだ．気候的および（農業）文化的な類似性に基づいて，ハウスホーファーは，モンスーン地域を地政学的な統合単位としてしばしば言及した．こうして，権力，歴史，社会（一例を挙げるならインドのカースト制度のような），宗教といった重要な違いがみられるにも関わらず，南アジア（インド）と東南アジア（マラヤ）のさまざまな英国植民地，仏領インドシナ，オランダ領東インドが，（半植民地的な）中国，独立国であるシャム（タイ）と日本といった沿岸諸国とともに，一つの地政学的実体としてまとめられた（Spang 2013: 354-357）．こうしたモンスーン地域の地政的近接性という概念は，1930年代半ば頃から日本で注目され，「大東亜共栄圏」を白人が支持するものとして解釈された（Spang 2013: 496-621, 630-631, 722）．

大陸横断的ブロックという彼の考えは，1913年に刊行された『大日本』にすでに認められたが，ドイツ学派地政学を打ち立てようとするハウスホーファーの強い熱意は，ドイツ帝国の崩壊とヴェルサイユ条約とによって生み出された．その多くの著作，ゲオポリティク誌，ラジオ講座で，彼は大衆を教育すると同時に，責任ある地位の政治家たちを手助けして大国としてのドイツを再興するための最良の意思決定を行おうとした．ハウスホーファーによれば，それはロシア／ソ連と日本との密接な協力によって可能になるものだった．「東方における生存圏」と無遠慮に言うのではなく，ハウスホーファーによるドイツの主張は，あらゆる民族に対して利用可能な空間の「公正な」配分のための需要に基づいていた．

4. ナチとの関係

ハウスホーファーは，1933-41年の間ナチ党の副総統だったルドルフ・ヘスRudolf Hessには，1919年に初めて会った．それは，彼の部下だった将校のマックス・ホフヴェーバーMax Hofweberがヘスを連れてきた時だった．後にヘスは，アドルフ・ヒトラーAdolf Hitlerのために働くようになる前に，ハウスホーファーの指導でしばらくの間研究を行った．25歳も年齢が離れていたにもかかわらず，ハウスホーファーとヘスは非常に親密で二人の友情はよく知られていた．マルタ・ハウスホーファーの父が（洗礼を施された）ユダヤ人だったという事実にもかかわらず，1941年まで，ヘスは友人の家族を守り続けたのだ．ニュルンベルクで1935年から38年まで4回開かれた著名な党大会で，ハウスホーファーはヘスの主賓だったため，ナチ党指導者の間では有名な人物となった．ヒトラー，ハインリッヒ・ヒムラーHeinrich Himmler, ヨアヒム・フォン・リッベントロップJoachim von Ribbentropやその他のナチ党指導者たちは，ハウスホーファーとその地政学概念を知っていたが，彼が決してナチ党員にはならなかったという事実は知らなかった．

ナチ体制に対するハウスホーファーの協力は，1919年時の国境を越えたドイツ人の生存のために働きたいという彼の義務感に基づいていた．この点について，ハウスホーファーが党員ではなかったにも関わらず，ドイツアカデミー（Deutsche Akademie, DA）の共同設立者となり，初期ナチ時代（1934-37）にはこの組織の会長を務めたことは指摘すべきだろう．同じ時期に彼は，民族ドイツ評議会（Volksdeutscher Rat, VR, 1933-35）にも関わった．これは，1938年末から1942年秋まで「在外全ドイツ民族同盟」（Volksbund für das Deutschtum im Ausland, VDA）の「指導者」となった組織である．これら全ての組織に共通するのは，1919年時の国境を越えたドイツ人の生存を支持しようとしたことである．これは民主制時代を通じて正当な課題であり，ナチスはこうした努力をさらに積み重ねて，「血と土Blut und Boden」のイデオロギーや「東方における生存圏Lebensraum im Osten」の要求へと結びつけたのだった（Jacobsen 1979-I: 188-201, 279-331）．

ハウスホーファーの考えがヒトラーに直接届いたのは1920年代半ばで，この将来の指導者とヘスが1924年の大半を刑務所で過ごしていた時期であった．ここで，ヘスは私的秘書の役割を果たし，ヒトラーは『わが闘争』（*Mein Kampf*）を執筆したのである．ハウスホーファーがランズベルク刑務所を何度も訪れ，クラウゼヴィッツやラッツェルの本だけでなく，『大日本』など日本に関する自著も持ち込んだことはよく知られている．また，彼はゲオポリティク誌の創刊号もヘスとヒトラーに送った．『わが闘争』下巻の第14章は生存圏の問題を扱っている．ヒトラーの著書のこの部分が直接的・間接的にハウスホーファーの影響を受けていることは一般に認められていることだ．同書の出版直後に，ヒトラーはエルンスト・ハンフシュテングルErnst Hanfstaenglにドイツにとって日本が重要だと語っているが，この考えはヒトラーがハウスホーファーから得たものに違いない．こうして，この地政学者が，日本および生存圏という問題に関して，ヒトラーの初期の態度に影響を与えたという強いヒントがある（Spang 2013: 385-393）．

1933年以降，ハウスホーファーはヘスとリッベントロップと接触し，独日関係の強化に努めた．1934年4月にハウスホーファーの私邸で行われたヘスと日本海軍のドイツ駐在武官だった遠藤喜一との秘密裏の会合は，ナチスのトップとドイツにおける日本側代表者との相互理解に向けた重要な一歩だった．さらに，リッベントロップと彼の部下は，ハウスホーファーの日本に対する積極的な見方と大陸横断的ブロック概念に影響されたと言われている．リッベントロップの半公的事務所である，いわゆるリッベントロップ機関Dienststelleの東アジア部門の長官を，1935-38年の間務めたヘルマン・フォン・ラウマーHermann von Raumer博士は，日本とソ連との結びつきを同時に改善しようと努めた．彼はゲオポリティク誌に寄稿し，ハウスホーファーと手紙を交わした．さらに，ソ連とオープンに向き合うよりも，共産主義インターナショナル（コミンテルン）に対抗して，1935-36年に議論した双務協定を目指すという考えを持っていたのは，ラウマーに他ならない．この考えは，見かけ上は，ソ連と地政学的な意味での「ロシア」とを区別するハウスホーファーの考えを反映するものだった（Spang 2013: 429-433）．

ナチ・ドイツの対外政策を外部から眺めると，ハウスホーファーの大陸横断的ブロック概念は，1935/36年から1941年にかけて，すなわち，1936年の反コミンテルン条約と1941年6月のソ連への攻撃との間にかけての日本とソ連との関係を築くための基本的なガイドラインのように見える．しかしながら，1939年のヒトラー・スターリン条約（独ソ不可侵条約）が日本に衝撃を与えたことを忘れてはならない．日本の親ドイツ的態度は，西側諸国だけでなくソ連も共通の敵であるということに強く依拠して

いたからだ．ヒトラー・スターリン条約の締結から数週間後，ドイツ外務省にはハウスホーファーを日本大使にと考える人々がいた．これは，ドイツ・ロシア・日本の協力体制が必要だというハウスホーファーの主張を，彼らがよく認識していたことを示すものであり，日本に対して，ナチ・ソビエト条約の「地政学的必然性」を彼に説明させようと予定していたことは明らかである．ヒトラー・スターリン条約(1939)，三国同盟(1940)，日ソ中立条約(1941)の組み合わせは大陸横断的ブロックをもたらしたものの，ヒトラーがスターリンと戦った「バルバロッサ作戦」は，ヒトラーという指導者が，戦時下でさえも，戦略的な地政学概念より，反共産主義イデオロギーと人種主義(反セム主義と反スラブ主義)という考えを確信していたことを示すものである．

全般的に言えば，ハウスホーファーは，1924年に，地政学とヴェルサイユ条約に対する共通の修正主義という斬新さに基づいて，若き日のヒトラーに影響を与えたのは明らかだ．後に，人種主義，とりわけ反セム主義が第三帝国の内外の政策の推進力となったとき，ハウスホーファーの地政学は，ヒトラーという指導者の，ソ連に対する現実的で攻撃的な意図にとって有用なカムフラージュとして以外，もはや関心を引かなかった．

ハウスホーファーの観点からすれば，事態は全く異なって見えた．陸軍少将で名誉教授である彼は，1920年代の好戦的で洗練されていない下士官を見下したのに対して，1930年代における対外政策の成功によって，ヒトラーは自らをドイツが必要とする真の指導者だと確信するようになった．ドイツ軍がプラハに押し入り，その後ポーランドを攻撃したとき，ハウスホーファーは，こうした動きの賢明さを疑い始めるようになったが，1941年に第三帝国がソ連を攻撃し米国との戦争を宣言するに至ると，最終的にヒトラーが間違った方向に進んでいると確信した．彼の息子のアルプレヒトとは異なって，その軍事的背景から，このコースが間違っていると確信しても，ハウスホーファーは最高指導者に対して陰謀を企むことができなかった．代わりに，彼の家族とりわけ半分ユダヤ人の妻を守るために，ハウスホーファーは晩年の著書においてヒトラーとドイツ軍を讃え続けた．

5．第二次世界大戦中の米国における反ハウスホーファープロパガンダ

戦争中の英米における刊行物において，ハウスホーファーは，たびたび，きわめて影響力の大きい人物として描かれた．こうした見方は，連合軍の反ドイツ地政学の成立を強く促すものとなった．ハウスホーファーは対極者として理解されたのだった．数年の間は，議論が正しいか否かは問題ではなかった．こうした状況にあって，「千人ものナチ科学者」を擁する「地政学研究所」がミュンヘンにあるというフレデリック・ソンダーンFrederic Sondernの主張は誤った見方である（Sondern 1941）．以来，「地政学研究所」という間違った考えがアメリカ人(およびイギリス人）によるハウスホーファーとドイツ地政学の見方に強く影響してきた．今日でさえも，ブリタニカウェブ百科事典では，ハウスホーファーが，実際には存在しなかった研究所の所長として描かれている．戦争中のプロパガンダの極端な例は，「ヒトラーの帝国への計画」という1942年の映画に見られる．その映画では，ナレーターが次のように述べる。

> ･･･今日の時代にあって最も奇妙で（最も）重要な人物の一人である･･･カール・E・ハウスホーファー博士，ドイツアカデミーの会長，ドイツ国防軍の陸軍少将，ナチの世界征服計画の首謀者によって･･･描かれた，膨大な征服計画．･･･ハウスホーファーのミュンヘン研究所は高度に組織化された世界的な諜報体系の中枢である．･･･9千人もの工作員の懸命な業務によって，･･･ハウスホーファーは，この世の土地と人々について集められた，最も漏洩防止されるべき，地理的・政治的・戦略的な知識の一つと信じられているものを･･･集めた．そして，こうした情報に基づいて，彼は地政学という科学ないしは「空間の軍事的支配」を･･･基礎づけたのだ．

「破滅への計画－ハウスホーファーによるナチの世界支配のための計画」というタイトルの映画(1944）も同様な主張をし，ハウスホーファー，ヘス，その他の人物を擬人化した役者を用いていた．ヨーロッパ戦線での勝利の日，すなわち，ナチス・ドイツが無条件降伏した日の米国の新聞には，ヒトラーの戦争をハウスホーファーと直接結びつけた記事を見出すことができる．例えば，「アドルフ・ヒトラーはどのように勝ち，帝国を失ったか？」という見出しで，ピッツバーグ・サンテレグラフ紙は，ナチの拡大のさまざまな段階を示す一連の地図を示し，1945年5月8日の読者に対して以下のように説明する．「ハウスホーファー教授と地政学協会の世界征服計画は，まず隣国の膨大な資源を手に入れることから始まった．ナチ・ドイツ(ハートランド)がそ

れらの獲得を企んだ順序が示される」.

それゆえ，米国政府の職員が，第二次大戦後に，76歳でひ弱なハウスホーファーを何度も尋問したが，ナチの戦争努力ないしは人道に反する犯罪に対する彼の関与の十分な証拠を見出せなかった．ハウスホーファーのドラマの最後の舞台は1946年3月10日である．それは，ドイツの敗戦に夢砕かれ，自らの地政学観のほとんどを否定され，ナチによって息子のアルプレヒト（1944年7月のヒトラー暗殺計画に関わった）を殺害された，カール・ハウスホーファーが妻とともに命を絶った日だ．

今日においてもなお，米国人のハウスホーファー観は1940年代の著作に歪められている．この傾向はハウスホーファーに関する最近の多くの著作においてもなお認められる（Herwig 2016）．『コロンビア百科事典』第6版（2001-05）を見ても明らかで，ウィキペディアの英語版のカール・ハウスホーファーの項目を見てもそうである．引用文献の多くが戦争中ないしは戦後間もない頃に出版されたものなのだ．

II. ドイツの地政学

1. 19 世紀における歴史的背景

19世紀後半に展開した産業革命, 帝国主義, (社会)ダーウィニズム，科学的法則の重要性の高まりは,（ドイツの）地政学の創設者の全てに強い影響を与えた．1900年頃，フリードリッヒ・ラッツェルFriedrich Ratzelやルドルフ・チェレーンRudolf Kjellénのような研究者たちはそうした法則を見出そうとし，国家の行動を説明できる全体系を打ち立てようとした．世界をそのような視点から眺めながら，気候学や地質学といった科学的法則に支配される分野から，人類地理学や政治地理学のような人文学に基づく分野へと広がる, 幅広い下位分野をもつ地理学は，そうした努力の理想的な土台に見えた．

とはいえ，科学においては諸法則が作用するにしても，政治と密接に結びついた分野においては滅多に作用することはない．初期の地政学者たちは世界を説明しようとすると同時に，将来を予測しようとするか，少なくとも，母国の指導者たちを助けて「正しい」方向に導こうとした．このように，多くの地政学者たちは，「地政学的法則」の構築が必要とされるほどには客観的ではなかった．アルフレッド・マハンやハルフォード・マッキンダーのような英米の著者たちがアングロ・サクソン的な観点で世界を眺めたのに対して，小牧実繁のような日本の地政学者たちは断固とした日本的見方を抱いていたし，フリードリッヒ・ラッツェルやカール・ハウスホーファーはドイツ人の視点から見ていた．地政学のこうした側面は，ピーター・J・テイラーPeter J. Taylorが，「地政学の場合，その著作から，常に著者の国民性を極めて容易に認めることができる」と，的確に述べている．（Taylor 1993: 53）．

このように述べてくると，ドイツ地政学の特異性を理解しようとするなら，こうした歴史的環境を考慮せねばならないことは明らかである．19世紀後半のドイツの歴史は統一（戦争）とアフリカおよびアジアにおける植民地の獲得に特徴づけられており，ラッツェルの決定論的な「成長空間の法則」と歩を一にしていた．国家を，成長ないしは衰退する生命体とみなす有機体的国家論と結びついた，ラッツェルの「法則」は，19世紀半ばを反映するものだった．にもかかわらず，積極的な考えは世紀末の悲観的ムードとは相容れなかった．1900年頃には，世界の全ての土地が取得されたため，「容易に」領土を増やすことができる空間はなくなり，地政学的「閉所恐怖症」感が広く漂っていた．

2. 刺激となった世界大戦の敗戦

こうした一般的状況に加えて，第一次世界大戦の敗北，とりわけ全植民地と西部領土（アルザス・ロレーヌとマルメディ・オイペン），北部領土（シュレスウィヒの一部），北東部領土（ダンツィヒおよびメメル）および南東部領土（ポズナニ，西プロイセン，上シレジア，フルチーン地域）の喪失とが，ドイツでは熱い論争となった．数多くの地理学者たちが失った領土を描いた膨大な地図を作成し，直接ないしは間接的に，この論争に加わった．敗戦を戦争に批判的な左翼主義者のせいにする，誤った「背後の一突き」伝説Dolchstoßlegendeが広く受容されたことと結びついて，この論争はドイツにおける失地回復的な雰囲気を生み出した．こうした状況において，政治的左翼と袂を分かった少数のドイツ人たちが，ワイマール共和国のために熱狂的になったことに加えて，新たな民主的政府が戦争犯罪条項（231条）を持つヴェルサイユ条約に調印せねばならなかったという事実が，民主主義への訴えをさらに弱めることになった．西側諸国に対する憎悪と失地回復主義が当時の雰囲気であり，極端なナショナリズムと地政学とを養う理想的な前提条件であった．

3. カール・E・ハウスホーファーとドイツ地政学

ドイツ地政学の父としばしば呼ばれるカール・ハウスホーファーは，1887年から1918/19年まで30年間にわたって軍務に就いた後，1919年から1939年まで，ミュンヘンのルードヴィッヒ・マクシミリアン大学で地政学，政治地理学，国防研究を教えた．彼は第一次世界大戦前ないしは戦争中にラッツェルとチェレーンとを見出し（そして彼らの考えに魅惑された）たものの，地政学という用語を積極的に用い始めるまでにはしばらく時間がかかった．1920年と1922年に，彼はそれほど重要でない2本の論文を書いた．その後，1923年と1924年はドイツ地政学にとって大躍進の年となった．第一に，ハウスホーファーはジョセフ・メルツJosef Märzとともに，1923年に『民族自決の地政学に向けて』*Zur Geopolitik der Selbstbestimmung*を出版した．第二に，その年の夏に，彼は初めて大学の講義名に「地政学」という用語を用いた．この授業を教えながら，彼は新雑誌『ゲオポリティク』創刊号の準備に追われており，同誌は1924年の1月に刊行された．最後に，この年にハウスホーファーは，彼の最も影響力のある著書となった『太平洋地政学』*Geopolitik des Pazifischen Ozeans*を出版した．

4. ゲオポリティク誌の他の代表的人物

リヒャルト・ヘニッヒRichard Hennigはそれほど知られてはいないものの，ゲオポリティク誌の代表的な論客であり，気候学および交通研究を専門としていた．彼の観点は，チェレーンの有機体的国家論に基づいており，地理的決定論につながったが，「政治的発展の25％までが地理によって説明できる」と主張したカール・ハウスホーファーの有名な主張よりもなお顕著な地理的決定論だった．ヘニッヒが1928年に『地政学－生命体としての国家の研究』*Geopolitik. Die Lehre vom Staat als Lebewesen*を刊行したとき，彼の見方はそれほど議論を巻き起こさなかったが，その後，レオ・ケルホルツLeo Körholzとの共著で，ナチが政権を取った2年目に刊行した『地政学入門』*Einführung in die Geopolitik*という著書は，彼の「地理的唯物論」と人種的思考の欠如という点で論争を巻き起こした．同書は，クルト・フォーヴィンケルKurt Vowinkelが強く支持していた，人種研究と地政学を統合しようとしたナチ指向的な「地政学研究グループ（Arbeitsgemeischaft für Geopolitik）」から厳しく批判された．

エヴァルド・バンゼEwald Banseは『ゲオポリティク』誌の編集メンバー以外のドイツ人地政学者で，1933年にナチ党NSDAPに加わった．バンゼは地理学を国防研究と結びつけようとして，カール・ハウスホーファーやオスカー・フォン・ニーダーマイヤーOskar von Niedermayerとともに，「国防地政学Wehrgeopolitik」という下位分野を構築し先導した．バンゼの著書『第一次世界大戦中の空間と大衆－国防教義に関する考察』*Raum und Volk im Weltkriege: Gedanken über eine nationale Wehrlehre*が刊行されたのは，ハウスホーファーの『国防地政学』*Wehr-Geopolitik*（1941年までに5回も版を重ねた）と同じ年で，ワイマール共和国末期の1932年だった．バンゼの著書はハウスホーファーのものほど評判は良くなかったものの，米国では大きな反響を呼び，1934年には『ドイツによる戦争の準備 ── ナチによる国防の理論』*Germany Prepares for War: A Nazi Theory of "National Defense"*というセンセーショナルなタイトルで刊行された．同書に関する議論は，英米両国の多くの人々が，バンゼ，ハウスホーファー，国防地政学を事実上初めて知ることとなった．ハウスホーファーとニーダーマイヤーが第一次世界大戦中に従軍して戦ったのに対して，バンゼは従軍地質学者として1917/18年に帝国軍に入隊した．バンゼの実戦経験の無さを根拠に，ハウスホーファーは『国防地政学』の創設者であるバンゼの主張を真面目に取り合おうとはせず，1930年代半ばに，多少の舌戦を繰り広げたに止まった．1930年代には，国防地政学以外にも，地法学geo-jurisprudence，地哲学geo-philosophy，地心理学geo-psychology，地医学geomedicineなど，さまざまな地政学の分野が生み出された（Spang 2013: 250-256）．

バンゼ，ハウスホーファー，ヘニッヒ，そして，（この3人に比べれば影響力は少なかった）ニーダーマイヤー以外にも，ここでは，ゲオポリティク誌の創刊と編集に関わった二人の地理学者／地政学者を簡単に紹介しておきたい．彼らがドイツ地政学の発展に大きな役割を果たしたからである．エーリッヒ・オプストErich Obstとオットー・マウルOtto Maullは1931年まで編集委員会でカール・ハウスホーファーに密接に協力した．オプストは同誌の共同創設者でもある．二人は，同誌にナチの支持を得ようとする，発行人クルト・フォーヴィンケルの新しい編集方針に反対した．オプストは，実際には，1933年に「アドルフ・ヒトラーと国家社会主義的国家に対するドイツ大学・高校教員の忠誠誓約」に署名し，アフリカ・植民地研究という，政治的にはそれほど過激ではないテーマに専念した．オットー・マウルの場合は，ゲオポリティク誌の編集委員会から離れたこ

とが，地政学を捨てたことを意味はしなかった．逆に，彼は幅広い著作活動を展開し，ゲオポリティク誌においてと同様，『地理学』*Erdkunde*誌においても，アメリカの事象に関する地政学的レポートBerichterstattungを書き続けた．彼は2冊の関連する著書を刊行した．一つは1936年に刊行された『地政学の本質』*Das Wesen der Geopolitik*で，もう一冊は1940年に刊行された，『地誌学と地政学』*Länderkunde und Geopolitik*を副題とする米国に関する本であった．

5. ゲオポリティク誌とナチス ──「血と土」の問題

ゲオポリティク誌は，最初は，ヴェルサイユ条約に反対する手段として，多くの保守主義者や国家社会主義者から歓迎されたものの，のちに，党の強硬派からは，ヘニッヒ（ある程度はハウスホーファーも）のような人々は半ば反動的だとみなされた．それは，彼らが地理，すなわち土地（Boden）を重視して政治的発展を説明することが，人種（血Blut）の影響を限定すると思われたからだ．破壊的（反セム主義）で「統合的な」（ニーチェの言う「超人」としてのアーリア人種）人種主義で全てを包括するナチのスローガンである「血と土Blut und Boden」の重要性を考慮に入れると，こうした地政学に対する否定的な見方は，ナチ体制が権力に止まり続ける限り，より影響力を持つようになった（Bassin 1987）．

6. 枢軸諸国におけるドイツ地政学の積極的受容

第二次世界大戦前，大戦中，大戦後を通じて，ドイツの地政学は英米において極めて否定的に受け止められた．こうしたアングロ・サクソンの戦争中のプロパガンダは主にハウスホーファーと彼の見解に焦点が当てられていたため，これについては，ハウスホーファーに関する前章の「5.」（pp. 33-34）を参照してほしい．逆に，イタリアや日本では，ドイツの地政学，とりわけ，ハウスホーファーの考えはかなり積極的に受け入れられた．ハウスホーファーはイタリアをたびたび訪れたが，そこでは，ゲオポリティク誌の姉妹誌である『ジオポリティカ』*Geopolitica*誌が1939-1942年の間刊行されていた．日本でも『ゲオポリティク』誌はよく読まれ，数多くの大学および図書館で購読されていた．1930年代半ば以降，ハウスホーファーの著書の何冊かが翻訳され，1941年には日本地政学協会が設立されて，協会によって『地政学』誌（1942-44）が刊行された．この協会と雑誌は日本の地政学の東京学派の中心となった（Spang 2013: 547-656）．これに対して，小牧実繁の指導下にあった日本地政学の京都学派はドイツ流の地政学とは距離を置き，代わりに当時の皇道主義というイデオロギーに基づいた日本独自の地政学を打ち立てようとした（Spang 2013: 656-711）．

7. ドイツにおける戦後の展開

1945年以降，地政学という用語がドイツでは全くのタブーとなってしまったと言われるが，これは真実ではない．西ドイツの代表的保守主義者で首相を務めたコンラート・アデナウアーKonrad Adenauerのような政治指導者は，この用語の使用を控えたものの，西ドイツの研究者の中には，ハウスホーファーの『ゲオポリティク』誌を復刊させた者もいたのである．新ゲオポリティク誌が1951年から1968年まで刊行されたにもかかわらず，こうした努力は，売り上げ部数においても影響力においても成功したとはいえなかった．逆に，東ドイツおよびソ連においては，「地政学」という用語は，「米国帝国主義」および西ドイツで活性化したネオ・ナチズムに対する冷戦初期のレトリックとして，1950年代に用いられた．ドイツ語に翻訳されたユーリ・N・セミョーノフJuri N. Semjonovの著書（Semjonov 1955）や，ドイツ社会主義統一党中央委員会から支持を受けていた，ギュンター・ヘイデンGünter Heydenの著書（Heyden 1955）は明らかにそれを示している．

後に，とりわけ，西ドイツのいわゆる「歴史家論争Historikerstreit」（1986-88）── ホロコーストの特異性と，ドイツ史のいわゆる「特有の道Sonderweg」に関わる西ドイツの歴史家たちの論争 ── において，地政学という用語がしばしば，反動的ないしはタカ派的とみなされたことから，この用語に対する一抹の不安があったにもかかわらず，ドイツ生まれのヘンリー・キッシンジャーHenry Kissingerやポーランド生まれのズビグネフ・ブレジンスキーZbigniew Brzeziñskiといった米国の政治家によってこの用語がたびたび使われたことで，西ドイツでも地政学に対する関心が高まった．

東西ドイツの統一とヨーロッパ内外の政治状況の変化によって，ドイツにおける「地政学」という用語に対するアプローチそのものは変化した．今日，地政学はしばしば用いられるものの，その多くはカール・ハウスホーファーや第三帝国についてほとんど触れることはない．

表1　ゲオポリティク誌の編集委員と編集協力者，1924-44年

	氏名/年	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935-39	1940-44
ゲオポリティク誌	カール・ハウスホーファー	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
	オプスト	○	○	○	○	○	○	○	○					
	ラウテンザッハ	△	○	○	○	○	△	△	△	△	△	△		
	ターマー	△												
	マウル		○	○	○	○	○	○	○					
世界政治・経済雑誌	バール				○	○	○							
	ヴィーデンフェルト				△	△	△	△	△	△	△	△		
	ヘルマン							○	○	△	△	△		
ゲオポリティク誌	ヴォーウィンケル								○					
	アルブレヒト・ハウスホーファー									△	△	△	△	

◎は単独編集者，○は共同編集者，△は編集協力者

III. ゲオポリティク誌

1. ゲオポリティク誌の創刊と編集者孤立主義と介入主義

1924-44年の間刊行され（戦後も1951-68年の間刊行された）『ゲオポリティク』誌は，世界で最初の「地政学」を冠した定期（似非）学術雑誌である．カール・Ｅ・ハウスホーファーとエーリッヒ・オプストを共同編集者として創刊された．若き編集者クルト・フォーヴィンケルは1931年と1950年代前半に共同編集者を務め，新旧雑誌を結びつける役割を果たした．戦間期および戦争中には，ドイツ内外で多大な関心を集めたため，本誌の創刊がドイツ学派地政学の開始とされる．

表1を見れば，ハウスホーファーが旧雑誌の主導者であることは明白だが，他の人物も1934/39年まで同誌の刊行に関わっていた．

2. 転機と内輪もめ

編集者・編集協力者の変化，出版方針および内容に基づくと，ゲオポリティク誌の刊行は3つの時期（1924-31年，1932-44年，1951-68年）ないしは4つの時期（1924-31年，1931-39年，1940-44年，1951-68年）に区分できる．これらの区分とは必ずしも一致しないが，これら以外に重要な転機が3つある．まず1927年で，この年にゲオポリティク誌は，それまでは独立した世界（経済）情勢専門誌だった『世界政治・経済雑誌』（*Weltpolitik und Weltwirtschaft*, W&W）と合併した．次いで1934年および35年には，ヘルマン・ラウテンザッハHerrmann Lautensachと二人の編集協力者が引退した．そして1939年にはアルブレヒト・ハウスホーファーがゲオポリティク誌の編集協力者を辞めた．

多数の地理学者および地政学者の中で，エーリッヒ・オプスト，ヘルマン・ラウテンザッハ，オットー・マウル，アルブレヒト・ハウスホーファーが，最も長きにわたってカール・ハウスホーファーの共同編集者を務めた．1927年から34年までの間は，アルフレート・バールAlfred Ballとアルトゥル・バールArthur Ball，クルト・ヴィーデンフェルトKurt Wiedenfeld，ゲルハルト・ヘルマンGerhard Herrmannが，ゲオポリティク誌の世界政治・経済雑誌部門の共同編集者ないしは協力者を務めた．主に経済的な理由で，この合併はフォーヴィンケルによって進められたが，著名な（国際的）著者や読者を集めるのに役立ち，1920年代後半にはゲオポリティク誌の評判を高めることとなった（Hepple 2008）．他方で，この合併はドイツ学派地政学の論を待たない代弁者としての本誌の性格をいくぶん弱めることにもなった（Harbeck 1963: 22-27）．

こうした展開は，元々ゲオポリティク誌を政治地理学者の雑誌として創刊しようとしたオプストやマウルとフォーヴィンケルとの間に深刻な対立を引き起こした（Natter 2003: 193-195）．彼らは地政学を政治地理学の実践的な応用とみなしていたが，フォーヴィンケルは政治学に近いものと理解していた．異例の軍事・学術的背景をもつカール・ハウスホーファーは中間の方向を進もうとした．これが，他の編集者たちが去った後も彼がただ一人で懸命に編集作業を行った理由である．

なお，戦争中におけるゲオポリティク誌最後の刊行となった21巻5/6（9/12月号, 1944）は，『自由学派雑誌』*Zeitschrift Schule der Freiheit*と戦時共同で刊行された．つまり，ゲオポリティク誌は，経済学者オットー・ラウテンバッハOtto Lautenbachの雑誌と強制的に合併させられたのである．

3. 出版部数

1929年の世界恐慌とともに生じた内部対立によって，ゲオポリティク誌は廃刊の危機に陥った．1928年には毎月4,000部に達していた出版数は，1930年代初期には2,500部に減少した．その後1937年には，出版部数は4,000部まで回復し，1939年には6,000部

に迫った．戦争中には，毎月9,500部が印刷され，そのうち30％が海軍ないしは戦場の兵士たちに送られた．こうした出版部数の増減は，各号のページ数にも反映されている．1928年には1,000ページを超えていたのに対して，1934年には800ページに減少した．1937年には再び1,000ページに達し，1939年には900ページに減少し，戦争中には600ページに減少した．1943年春以降には隔月刊となり，ページ数も年間で350ページまで減少した．1944年に刊行された最後の5冊は250ページに満たなかった（Spang 2013: 243）．

全体的には，ゲオポリティク誌は1924年から44年までの間におよそ百万部印刷されたと思われる．戦前には，およそ25％が大学，図書館，海外の読者に送られていた（Harbeck 1963: 15-16）．ドイツ国内の図書館に配布されていたことから，定期購読者数は出版部数よりはるかに多かったと思われ，戦前と戦中の時期には，ゲオポリティク誌が地政学的思考の普及に重要な役割を果たしていた．

4．ゲオポリティク誌のナチ化

ゲオポリティク誌の展開に話を戻すと，1931/32年に重要な変化が生じた．オプストとマウルが編集委員会から去ったのである．同誌に対するナチの支持をさらに高めようとしたクルト・フォーヴィンケルの意向に反対したためである．オプストは，ハウスホーファーの世界観やソ連との同盟の可能性ないしは願望においても意見が異なっており（Dostal 2016: 51-37），編集委員を辞めてからは地政学分野との関わりもほぼ無くなった．これに対してマウルは，他の雑誌において地政学との関わりを持ち続けた．ラウテンザッハは，1938年までゲオポリティク誌の編集協力者に止まり，さまざまな論文を刊行し続けた．カール・ハウスホーファー単独の編集体制となってからは，同誌に対する国家社会主義的イデオロギーの影響力が強まった．これは，1932年に設立されたナチを強く志向する人種主義的な「地政学研究グループ（Arbeitsgemeinschaft für Geopolitik）」に深く関与していたフォーヴィンケルによって推し進められたものだった．こうして，当初は保守的で失地回復主義的だったゲオポリティク誌は，ナチが政権を獲得するまさに直前に国家社会主義的傾向を強く持つようになったのである（Harbeck 1963: 29-47）．

5．カール・ハウスホーファーとゲオポリティク誌

カール・ハウスホーファーがゲオポリティク誌で公表された主張に関してどれほど支配的だったのかという問いをめぐっては，これまでにも論争があった（Sprengel 1996: 18-19. Spang 2013: 239-240）．「月報 Berichterstattung」というジャンルでは，ハウスホーファーらがアジアと太平洋，オプストがヨーロッパとアフリカ，マウル（のちにアルプレヒト・ハウスホーファー）がアメリカと大西洋を担当していたが，このジャンルを除くとカール・ハウスホーファーの寄稿は6.5％にしか過ぎないけれども，これを含めると18％にまで高まるのである．こうして，ゲオポリティク誌において刊行された記事のうち6本に1本がカール・ハウスホーファーによって執筆され，彼は同誌の最も卓越した著者であった．このことは，同誌においてアジア関連の記事が卓越したことの現れでもある（Spang 2013: 174. Dostal 2016: 53-64）．1938/39年までは，ヒトラーの対外政策の成功を根拠として，（当時のドイツの保守主義者とともに）カール・ハウスホーファーはナチを支持した．この好例はゲオポリティク誌にも見られる．「1936年3月29日の地政学の主張Stimme der Geopolitik zum 29. März 1936」（ZfGp 1936: 247）および「1938年の地政学的収穫感謝祭！ Geopolitischer Erntedank 1938!」（ZfGp 1938: 781-782）を参照されたい．第二次世界大戦開始後，ハウスホーファーは，その論説「収穫Herbsten?」（ZfGp 1939: 741-743）において，英国政府を非難した．のちに彼は，「世界像解明の責務Verpflichtung zum klaren Weltbild」（ZfGp 1943: 1-7）を寄稿して，ドイツ人大衆の戦意を高めた．

6．1945年以降のゲオポリティク誌

戦後に復刊したゲオポリティク誌は，ドイツの地政学的思考の傑出した代弁者としてのかつての地位を超えることは決してなかった．最近の研究によれば，西ドイツ時代のゲオポリティク誌は，1956年の編集体制の変化によって，二つの時期に区分される．戦後最初の編集長はカール・ハインツ・プフェファーKarl Heinz Pfefferで，彼は熱心なナチ党員であり，ベルリン大学海外研究学部の前学部長だった．1956年にロルフ・ヒンダーRolf Hinderが編集長を引き継ぎ，ゲオポリティク誌と『共同社会と政治学』*Gemeinschaft und Politik*誌を合併した．この最後の合併号は，ボンにあった地社会学・政治学研究所によって刊行された．プフェファーの受動的な方針とは異なり，ヒンターは積極的に自らの課題を押し進め，西ドイツにとって，政治的には中立的な「第三の道」の議論を展開した．冷戦下で，コンラート・

アデナウアー首相による親西側，反共産主義，保守的政策の社会にあっては，ゲオポリティク誌の評判は高まるはずがなく，1968年にはついに廃刊となった．

IV. 汎地域

1.「汎概念」vs.「汎地域」

カール・E・ハウスホーファーがその著書『汎概念の地政学』*Geopolitik der Pan-Ideen*を1931年に刊行したとき，「地域」ではなく「概念」としたのは偶然の一致ではない．「汎地域」が明白な地理的特徴に基づく地政学用語を示すのに対して，「汎概念」は幅広い意味を持ち，具体的な地理的基礎を欠くのがしばしばである．その著書のまえがき（p. 5）において，ハウスホーファーはほとんどの汎概念は単なる「空中楼閣Luftschlösser」に過ぎないと明確に記している．ハウスホーファーが同書で述べる「汎概念」は，それまでにすでに存在していたものだ．したがって，ハウスホーファーがこの用語を創出したとする，幅広い見方は言い過ぎだろう（Parker 1998: 33, 123）．にもかかわらず，『汎概念の地政学』はこうした考えを要約し比較しようとした最初のものである．

2. ドイツ地政学の転換点としての 1931 年

あらゆる点で，本書のタイミングは重要だった．1928年5月の選挙で惨敗（2.6%）した後，ナチ党（NSDAP）の得票率は1930年9月の選挙では18.3%に達し，帝国議会Reichstagで第2党になった．この成功はドイツ地政学には悪影響を与えた．というのも，ゲオポリティク誌の発行者だったクルト・フォーヴィンケルがより一層「国家社会主義者」へ，すなわち，人種主義者へと突き進んだのに対して，他の編集者たちがこれに反対し，エーリッヒ・オプストとオットー・マウルが，1931年に編集委員会を去ったからである．1932年からは，ハウスホーファーが唯一の編集者として発行を続けたという事実は，必ずしも彼がフォーヴィンケルの路線を支持していたことを意味するわけではない．実際，ハウスホーファーはナチ党の党員にはならなかったのだ．

3. 土台としての人種 vs. 地理

『汎概念の地政学』において，ハウスホーファーは人種に基づく「汎概念」を述べることは稀だった．「汎ゲルマン主義」や「汎スラブ主義」のような影響力のある概念でさえも扱われることはなかった．それゆえ，彼の本は，1931/32年のドイツ地政学における人種主義的傾向に対しては間接的声明とみなされうる．こうして，同書がフォーヴィンケルではなく別の発行者から出版されたことは驚くにあたらない．概して，ハウスホーファーは，汎概念の将来性に関しては，むしろ懐疑的だった．彼はヨーロッパ中心の国際連盟を世界大の国際問題を解決するために即席に創られたものとみなしていたため，汎地域が将来の発展において国際連盟と個々の国家との間で一種の調停者になるかもしれないという希望を表明していた（Haushofer 1931: 15, 83, 90）．

4. 世界地図の区分

ハウスホーファーは，異なる汎概念の多くが対立する事例として米国を示している．彼によれば，これら異なる汎概念は，汎アメリカ主義という大陸的概念と汎太平洋主義という海洋的概念とを同時に支えるものだった．度重なる彼の主張によれば，多くの汎概念は重なり合い，互いに矛盾している（Haushofer 1931: 8, 84）．したがって，米国を頂点とする汎アメリカ，ドイツとイタリアの支配下にあるユーラフリカ，日本の指導下にある汎アジア，ソビエトの支配下にあるユーラシアといった，世界を三つないしは四つに区分する擁護者として，ハウスホーファーが幅広く理解されたのは，少なくとも1930年代初期においては明らかに誤りであることを，こうした矛盾が示しているように思われる．彼の著書『汎概念の地政学』のどこにも，ハウスホーファーがそうした世界の地域区分を熱心に主張したことは見当たらない．

彼の著書（Haushofer 1931: 9）にある全ての地図の中で最も一般的なものは，世界を五つのブロックとどこにも区分されない「自由な」国々とに区分したものである．しかし，そのキャプションには，その地図がリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーRichard Coudenhove-Kalergiによる汎ヨーロッパ連合概念――第二次世界大戦後に，今日のヨーロッパ連合の先駆けの一つとしてたびたび理解されてきた――に基づくものだと書かれている．それにもかかわらず，1931年には，ハウスホーファーは，何百万人もの人々の民族自決に背き，潜在的に戦争の原因となるものとして，この概念を批判したのである（Haushofer 1931: 10）．その地図が示すのは，（1）

汎ヨーロッパ（英国以外のヨーロッパの植民地を含む），(2)汎アメリカ(カナダを除く)，(3)大英帝国，(4) ロシア／ソ連，(5)「東アジア」(中国，朝鮮，日本を含むもので，何らかの汎概念は明示されていない)である．これら五つのブロック以外に，トルコ，イラン，アフガニスタン，エチオピア，タイが独立諸国として示されている．

5. ゲオポリティク誌と世界の区分

ゲオポリティク誌がさまざまな用語を用いたというだけで，同誌のアウトラインが「汎ヨーロッパ，汎アメリカ，汎アジアという地球の三区分」というハウスホーファーの考えを固めたという主張（O' Loughlin 1994: 193）も誤りである．同誌は，その論文を区別するのに「汎」という接頭語の付いた表現を決して用いなかった．実際，ゲオポリティク誌は，共同編集者であるエーリッヒ・オプスト，カール・ハウスホーファー，オットー・マウルによるレポートを，元々は，「旧世界地域」，「インド・太平洋世界」，「大西洋世界」という形で区分した．1925年には，オプストが自らの報告を(「旧世界」に替えて)「ヨーロッパとアフリカ」に変更し，マウルの報告も「アメリカの半球」に集約された．いくつかの変更がみられたのち，1932年から1939年までの大半の報告は以下のように区分された．アルプレヒト・ハウスホーファーによる「大西洋世界地域」と彼の父による「インド・太平洋地域」とである．

6. 大陸横断的ブロック

ハウスホーファーが最も気に入っていた理論は，ドイツ，ロシア／ソ連，日本を束ねた，大陸横断的ブロックという概念で，世界を三つ，四つないしは五つのブロックへと区分するものとはいくぶん異なる．彼はこの考えを東アジアから戻った直後に初めて図式化しており，マッキンダーの理論とハウスホーファーとの直接的な結びつきという想定は歴史家による産物のようだ．のちに，ハウスホーファーはマッキンダーのハートランド理論を知り，ロシア・ドイツ関係の重要性という点で，自らの世界観とマッキンダーのそれとが重なることを理解したものの，ベルリンとサンクト・ペテルブルクないしは後のモスクワとの協力（ハウスホーファー）か否か(マッキンダー)のいずれが望ましいのかという問題になると見解を異にした．

もしハウスホーファーの心の中に，何らかの世界の大区分があったとすれば，一方には（フランスも含めた）アングロ・アメリカという「持つ」国々の線に沿ったものがあり，他方には，「持たざる」国々があった．こうして，世界においてより大きな役割を願うドイツの主張を反西欧的脱植民地主義の主張と結びつけることを可能にしたのである．

7. 汎アジア主義

1931年に，ハウスホーファーは，汎アジア主義を，モスクワを基礎とする概念，すなわち，アジアを統合して共産主義拡大の手段とする，共産主義体制の試みとして理解した．これは，汎アジア主義の特異な解釈として述べるべきである．というのも，彼は汎アジア主義を米国指導下の汎太平洋主義の主たる敵と見ていたからだ．ある意味では，ハウスホーファーは，後の冷戦の対立を汎概念に基づいて予測していたことになる．ここに，アルフレッド・マハンとハルフォード・マッキンダーの対立，すなわち，ランドパワー（ソ連)とシーパワー（米国)の対立を見ることができる．彼は，1930年代前半までに両国が国際連盟に加盟しなかった理由の一つは，何らかの国際干渉を認めたがらないことにある，すなわち，両国の汎概念の対立が理由だとまで主張したのである(Haushofer 1931: 78)．

最近，汎アジア主義の歴史が多くの出版物で話題になっているが（Saaler-Koschmann 2007, Saaler-Szpilman 2011, Weber 2018)，その多くは，19世紀末ないしは20世紀初期にまで遡って，東アジア共同体に関する中国と日本との協力に焦点を当てている．この分野で積極的に活動しているスヴェン・サーラーSven Saalerは，2007年の著作『近代日本の歴史における汎アジア主義』*Pan-Asianism in Modern Japanese History*の序文(pp. 2-3)で，次のように述べている．

> 「汎アジアイデオロギーは，「日本人の」アイデンティティの創造過程と同様，近代日本の対外政策のどこにでもある諸力の一つであった．･･･それは日本政府の「現実主義的な」対外政策に対するアンチテーゼとしてのイデオロギーへと進展した･･･．初期の汎アジア主義の著作には，･･･日本のアジアとの共同性を強調するとともに，アジアの人々と国々を統一して西洋の進出から守ることを目的としていた．」

この引用は二つのことを示している．第一に，汎概念がハウスホーファーの1931年の著書よりもはる

かに古いという以前からの主張を支持するものだということ．第二に，この引用が汎概念の別の側面を述べていることである．これらの大半は積極的なもので，統合的な側面を有していた．その反面，消極的なものもあり，大半の汎概念は他者に向けられていた．上に引用した事例のように，「他者」とは西洋の植民勢力である．それゆえ，19世紀および20世紀初期の汎アジア主義には二つの重要なルーツがある．一つは統一意識であり，二つ目は共通の敵に立ち向かう意識である．

8．おわりに

以上をまとめると，ハウスホーファーの汎概念の地政学とは，実はすでに何十年にもわたって構築されてきた考えの記述と評価に過ぎないことを繰り返さねばならない．このことは誤りを認めるのではなく，世界を揺るぎのない三つないしは四つに区分するという提唱者としての，しばしば繰り返されてきたハウスホーファーの見方である．

注

1) 本稿は，丸善出版から刊行予定の『現代地政学事典』のためにシュパング氏が英語で執筆した，「カール・ハウスホーファー」「ドイツの地政学」「ゲオポリティク誌」「汎地域」の4項目のオリジナル原稿を，高木が日本語に翻訳して一つにまとめたものである．

訳者あとがき

本稿は，クリスティアン・W・シュパングChristian Wilhelm Spang氏によって書かれた「カール・ハウスホーファー」「ドイツの地政学」「ゲオポリティク誌」「汎地域」の，4つの原稿を「カール・ハウスホーファーとドイツの地政学」という表題としてまとめたものである．これら4つの原稿は，もともと丸善出版から刊行予定の『現代地政学事典』の4つの項目のために英語で執筆されたものである．

同事典の編集者である訳者（高木）が，シュパング氏によって書かれた英語のオリジナル原稿を，事典の項目のフォーマット（2頁ないしは4頁）に和訳する作業を行ったものの，オリジナル原稿のボリュームが大きく，事典の制限字数内にまとめようとすると，大幅な要約となってしまい，オリジナル原稿に書かれた貴重な内容が無駄になってしまうという懸念が生じた．そこで，訳者は，4原稿を「カール・ハウスホーファーとドイツの地政学」という表題で一つの論文としてまとめ，その翻訳を本誌に掲載してみようと思い立った．シュパング氏と丸善出版にこの企画を打診したところ，いずれも快諾されたため，こうして翻訳論文として掲載することができた．これら4項目はもともと別個の項目として執筆されたものであるため，ひとつにまとめると，内容的な重なりが目立つし，論文構成も必ずしも統一のとれたものにはなっていない．こうした不具合があるとはいえ，オリジナル原稿が持つ貴重な内容を失うことなくこうして掲載できるメリットの方を訳者は優先したしだいである．

シュパング氏によれば，同氏は1968年ドイツ生まれ，エアランゲン大学とフライブルク大学（この間ダブリン大学に1年間留学）で近現代史，中世史または英語学をそれぞれ学んだ後，フライブルク大学の大学院に進み，1997年に「ナチスの日本像とその形成におけるカール・ハウスホーファーの役割」の研究で修士の学位を取得した．さらに，同大学院の博士課程に進学して「ハウスホーファーと日本」の研究により，2009年に博士の学位を取得した．この学位論文は，『ハウスホーファーと日本』（Karl Haushofer und Japan. Die Rezeption seiner geopolitischen Theorien in der deutschen und japanischen Politik）として2013年に刊行された．この間，1998年に来日し，東京大学歴史学研究室に研究生として滞在した後，2000年10月から2006年3月まで国際基督教大学アジア文化研究所の研究助手，2009年4月～2012年3月には筑波大学外国語センター 准教授，2012年4月～2016年3月には大東文化大学准教授，2016年4月には教授に昇任し現在に至っている．

なお，著者のシュパング氏による翻訳論文が故石井素介氏の翻訳により，本誌第6号（2001）に「カール・ハウスホーファーと日本の地政学」（pp. 2-21）として掲載されている．併せてお読みいただければ幸いである．

文献

Anonymus, 2018. “Haushofer, Karl”, *The Columbia Encyclopedia,* Sixth Edition, URL: https://www.encyclopedia.com/reference/encyclopedias-almanacs-transcripts-and-maps/haushofer-karl (3/3/2019).

Anonymus, 2018. “Haushofer, Karl”, *Wikipedia,* URL: https://en.wikipedia.org/wiki/Karl_Haushofer (3/3/2019).

Anonymus, 2018. “Karl Haushofer”, *Encyclopædia Britannica Online*, URL: https://www.britannica.com/biography/Karl-Ernst-Haushofer (3/3/2019).

Anonymus, 1945. “How Adolf Hitler won, lost an Empire”, *Pittsburgh Sun-Telegraph*, (May 8, 1945), Section Two: 1.

Banse, Ewald, 1932. *Raum und Volk im Weltkriege – Gedanken über eine nationale Wehrlehre*, Gerhard Stalling Verlag (Oldenburg).

Banse, Ewald, 1934. *Germany Prepares for War: A Nazi Theory of “National Defense”*, translated by Alan Harris, Harcourt, Brace and Company (New York).

Bassin, Mark, 1987. “Race Contra Space: The Conflict between German Geopolitik and National Socialism”, *Political Geography Quarterly*, 6 (2), 115–134.

Dostal, Jörg Michael, 2016. “Auf der Suche nach dem Dreh- und Angelpunkt der Geschichte: Die Eurasien-Debatte der Zeitschrift für Geopolitik (1924-1932) (In Search of the Geographical Pivot of History: The Eurasia Debate in the Zeitschrift für Geopolitik (1924-1932))”, *Zeitschrift der Koreanisch-Deutschen Gesellschaft fuer Sozialwissenschaften (한독사회과학논총)*, 26 (4), 29-72.

Dostal, Jörg Michael, 2017. “Die „Zeitschrift für Geopolitik“ zwischen 1951 und 1968 - Korea-, Vietnam- und Kalter Krieg aus deutscher und eurasischer Sicht (The Journal of Geopolitics (Zeitschrift für Geopolitik) between 1951 and 1968 - German and Eurasian Analysis of the Korean and Vietnam Wars During the Cold War Era -)”, *Zeitschrift der Koreanisch-Deutschen Gesellschaft fuer Sozialwissenschaften (한독사회과학논총)*, 27 (4), 3-52.

Harbeck, Karl-Heinz, 1963. *Die “Zeitschrift für Geopolitik“ 1924–1944*, PhD dissertation, Christian-Albrechts-Universität zu Kiel.

Haushofer, Karl, 1913. *Dai Nihon, Betrachtungen über Groß-Japans Wehrkraft, Weltstellung und Zukunft*, E.S. Mittler und Sohn (Berlin).

Haushofer, Karl, 1914. *Der deutsche Anteil an der geographischen Erschließung Japans und des subjapanischen Erdraums, und deren Förderung durch den Einfluß von Krieg und Wehrpolitik*, PhD Dissertation, Junge Verlag (Erlangen).

Haushofer, Karl, 1931. *Geopolitik der Pan-Ideen*, Zentral-Verlag (Berlin).

Haushofer, Karl, 1936. “Stimme der Geopolitik zum 29. März 1936”, *Zeitschrift für Geopolitik*, 13 (4), 247.

Haushofer, Karl, 1938. “Geopolitischer Erntedank 1938!”, *Zeitschrift für Geopolitik*, 15 (10), 781-782.

Haushofer, Karl, 1939. “Herbsten?”, *Zeitschrift für Geopolitik*, 16 (10), 741-743.

Haushofer, Karl, 1943. “Verpflichtung zum klaren Weltbild. Der Großostasiengedanke in der deutschen Geopolitik”, *Zeitschrift für Geopolitik*, 20 (1), 1-7.

Haushofer, Karl & Josef März, 1923. *Zur Geopolitik der Selbstbestimmung*, Rösl (München).

Heffernan, Michael J., 2000. “Fin de siècle, fin du monde? The Origins of European Geopolitics, 1890–1920”, David Atkinson & Klaus Dodds (eds), *Geopolitical Traditions. Critical Histories of a Century of Geopolitical Thought*. Taylor & Francis (New York, London), 27-51.

Hennig, Richard, 1928. *Geopolitik. Die Lehre vom Staat als Lebewesen*. B. G. Teubner (Leipzig).

Hepple, Leslie W., 2008. “Dudley Stamp and the Zeitschrift für Geopolitik”, *Geopolitics*, 13 (2), 386–395.

Herwig, Holger H., 2016. *The Demon of Geopolitics. How Karl Haushofer ‘Educated” Hitler and Hess*, Rowman & Littlefield (Lanham).

Heyden, Günter, 1955. *Die deutsche Geopolitik, eine faschistische Richtung der bürgerlichen Soziologie*, Institut für Gesellschaftswissenschaften beim ZK der SED (Ost-Berlin).

Jacobsen, Hans-Adolf, 1979. *Karl Haushofer. Leben und Werk*, 2 Volumes, Harald Bold (Boppard).

Kost, Klaus, 1988. *Die Einflüsse der Geopolitik auf die Forschung und Theorie der Politischen Geographie von ihren Anfängen bis 1945*, Dümmler (Bonn).

Lea, Homer, 1912. *The Day of the Saxon*, Harper (New York).

Natter, Wolfgang, 2003. “Geopolitics in Germany, 1919–45: Karl Haushofer, and the *Zeitschrift für Geopolitik*”, John Agnew et al. (eds), *A Companion to Political Geography*, Wiley-Blackwell (Oxford), 187–203.

Norton, Donald H., 1968. “Karl Haushofer and the German Academy, 1925–1945”, *Central European History*, 1, 80–99.

O’Loughlin, John, 1994. *Dictionary of Geopolitics*, Greenwood Press (Westport).

O’Loughlin, John, 1994. “Panregions”, in John O’Loughlin (ed), *Dictionary of Geopolitics*, Greenwood Press (Westport), 192-194.

Parker, Geoffrey, 1998. *Geopolitics: Past, Present, and Future*, Pinter (London).

Semjonow, Juri N., 1955. *Die faschistische Geopolitik im Dienste des amerikanischen Imperialismus*, Dietz Verlag (Ost-Berlin).

Sondern, Frederic, Jr., 1941. “Hitler’s Scientists, 1.000 Nazi Scientists, Technicians and Spies Are Working under Dr. Karl Haushofer for the Third Reich”, *Current History*, 1 (53), 10-12, 47-48.

Spang, Christian W. 2013. *Karl Haushofer und Japan. Deutsch-japanische Netzwerke in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts*, Iudicium (München).

Spang, Christian W. and Milovanovic, Igor, 2011. “An Introduction to Early 20th Century Geopolitics”, *Outside the Box: The Tsukuba Multi-Lingual Forum*, 4 (1), 8-17.

Spang, Christian W., 2018. *Karl Haushofer und die OAG. Die Rezeption seiner geopolitischen Theorien in der deutschen und japanischen Politik*, Iudicium (München).

Sprengel, Rainer, 1996. *Kritik der Geopolitik: ein deutscher Diskurs, 1914–1944*, Akademie Verlag (Berlin).`

Sven, Saaler & Koschmann, Victor, J., 2007. *Pan-Asianism in Modern Japanese History*, Routledge (London & New York).

Sven, Saaler & Szpilman, Christopher, W. A. (eds), 2011. *Pan Asianism: A Documentary History, 2 Volumes*, Rowman & Littlefield (Lanham).

Taylor, Peter J., 1993. *Political geography. World-economy, nation-state and locality*, 2nd edition, Longman (London).

Weber, Torsten, 2018. *Embracing "Asia" in China and Japan. Asianism Discourse and the Contest for Hegemony*, 1912-1933, Palgrave Macmillan (Basingstoke).

シュパング，クリスティアン，W.（石井素介訳）2001.「カール・ハウスホーファーと日本の地政学」空間・社会・地理思想6, 2-21.